

現代の文学 11

三島由紀夫

昭和四七年五月一六日 第一刷発行

著 者 三島由紀夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二一 / 郵便番号 一―二―

電話東京(〇三)九四五―一―二一(大代表) / 振替東京三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定 価 六八〇円

目次

仮面の告白 5

禁色 113

真夏の死 427

蘭陵王 458

卷末作家論／磯田光一 463

年譜 473

装幀／横山明・依岡昭三
卷頭写真／野上透

三島由紀夫

仮面の告白

美——美という奴は恐ろしい怖^{おそ}かないもんだよ！　つまり、
杓子定規に決めることが出来ないから、それで恐ろしいの
だ。なぜって、神様は人間に謎ばかりかけていらっしやるも
んなあ。美の中では両方の岸が一つに出合って、すべての矛
盾が一緒に住んでいるのだ。俺は無教育だけれど、この事は
ずいぶん考えぬいたものだ。実に神秘は無限だなあ！　この
地球の上では、ずいぶん沢山の謎が人間を苦しめているよ。
この謎が解けたら、それは濡れずに水の中から出て来るよう
なものだ。ああ美か！　その上俺がどうしても我慢できない
のは、美しい心と優れた理性を持った立派な人間までが、往
往聖母の理想を懐いて踏み出しながら、結局悪行の理想をも
って終るといふ事なんだ。いや、まだまだ恐ろしい事があ
る。つまり悪行の理想を心に懐いている人間が、同時に聖母
の理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のように、
真底から美しい理想の憧憬を心に燃やしているのだ。いや実
に人間の心は広い、あまり広過ぎるくらいだ。俺は出来る事
なら少し縮めてみたいよ。ええ畜生、何が何だか分りやしな
い、本当に！　理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目に

は立派な美と見えるんだからなあ。一体悪行の中に美がある
のかしらん？
……しかし、人間て奴は自分の痛いことばかり話したがる
ものだよ。

——ドストエーフスキイ「カラマーゾフの兄弟」

第三篇の第三、熱烈なる心の懺悔——詩

第一章

永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことが
あると言いつ張っていた。それを言い出すたびに大人たちは
笑い、しまいは自分がからかわれているのかと思つて、
この着ざめた子供らしくない子供の顔を、かるい憎しみの
色さした目つきで眺めた。それがたまたま馴染みの浅い客
の前で言ひ出されたりすると、白痴と思われかねないこと
を心配した祖母は険のある声でさえぎって、むこうへ行っ
て遊んでおいでと言つた。

笑う大人は、たいてい何か科学的な説明で説き伏せよう
としますが常だつた。そのとき赤ん坊はまだ目が明いて
いないのだとか、たとい万一明いていたにしても記憶に残
るようにはつきりした観念が得られた筈はないのだとか、
子供の心に呑み込めるように碎いて説明してやろうと息込
むときの多少芝居がかつた熱心さで喋りだすのが定石だつ

た。ねえそうだろう、とまだ疑ぐり深そうにしている私の
ちいさな肩をゆすぶっているうちに、彼らは私の企らみに
危うく掛るところだったと気がつくらしかった。子供だと
思っていると油断ができない。こいつ俺を罠なわにかけて「あ
のこと」をきき出そうとしているにちがいない、それなら
何だってもっと子供らしく無邪気に訊けないものだろう、
「僕どこから生れたの？ 僕どうして生れたの？」と。――
彼らは、あらためて、黙ったまま、何のせいかしらさずひ
どく心を傷つけられたしるしの薄ら笑いをじっとりとうか
べたまま、私を見やるのが落ちだった。

しかし、それは思いすごしというものである。私は「あ
のこと」などについて何を訊きたいわけでもなかった。そ
れでなくても大人の心を傷つけることが怖くてならなかつ
た私に、罠なわをかけたりまする策略のうかんでくる筈がなかつ
た。

どう説き聞かされても、また、どう笑い去られても、私
には自分の生れた光景を見たという体験が信じられるばか
りだった。おそらくはその場に居合わせた人が私に話して
きかせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだ
った。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たと
しか思われないうところがあった。産湯うぶゆを使わされた鹽しほのふ
ちのところである。下したての爽やかな木肌の鹽しほで、内が
わから見ていると、ふちのところにほんのりと光りがさし
ていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金きんごでできて

いるようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐める
かとみえて届かなかった。しかしそのふちの下のところの
水は、反射のためか、それともそこへも光りがさし入って
いたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がた
えず鉢合せをしているようにみえた。

――この記憶にとって、いちばん有力だと思われた反駁
は、私の生れたのが昼間ではないということだった。午後
九時に私は生れたのであった。射してくる日光のあろう筈
はなかった。では電燈の光りだったのか、そうからかわれ
ても、私はいかに夜中だろうとその鹽しほの一箇所にはだけ日
光が射していなかったでもあるまいと考える背理のうち
へ、さしたる難儀もなく歩み入ることができた。そして鹽
のゆらめく光りの縁は、何度となく、たしかに私の見た私
自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに揺曳した。

震災の翌々年に私は生れた。

その十年まえ、祖父が植民地の長官時代に起った疑獄事
件で、部下の罪を引受けて職を退いてから（私は美辞麗句
を弄しているのではない。祖父がもっていたような、人間
に対する愚かな信頼の完璧さは、私の半生でも他に比べら
れるものを見なかつた。）私の家は殆ど鼻歌まじりと言
いたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を迂りだした。莫大な
借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫きうぱくが加わるにつれ
暗い衝動のようにますますもえさかる病的な虚栄。――こ
うして私が生れたのは、土地柄のあまりよくない町の一角

にある古い借家だった。こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂などにひろい洋間などのある・坂の上から見ると二階建てであり坂の下から見ると三階建ての・燻んだ暗い感じのする・何か錯雑した容子の威丈高な家だった。暗い部屋がたくさんあり、女中が六人いた。祖父、祖母、父、母、と都合十人がこの古い簞笥のようにきしむ家に起き伏ししていた。

祖父の事業慾と祖母の病氣と浪費癖とが一家の悩みの種だった。いかがわしい取巻き連のもってくる絵図面に誘われて、祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしばしば旅した。古い家柄の出の祖母は、祖父を憎み蔑んでいた。彼女は猶介不屈な、或る狂おしい詩的な魂だった。痼疾の脳神経痛が、遠まわしに、着実に、彼女の神経を蝕んでいた。同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智に増した。死にいたるまでつづいたこの狂燥の発作が、祖父の壮年時代の罪の形見であることを誰が知っていたか？

父はこの家で、かよわい美しい花嫁、私の母を迎えた。大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲った。夜九時に六五〇匁の小さい赤ん坊が生まれた。フランネルの襦袢・クリームいろの羽二重の下着・お召の緋の着物を着せられたお七夜の晩、祖父が一家の前で、奉書の紙に私の名を書き、三方の上ののせ、床の間に置いた。

髪がいつまでたっても金色だった。オリヅ油をしじゅうつけているうちに黒くなった。父母は二階に住んでい

た。二階で赤ん坊を育てるのは危険だという口実の下に、生れて四十九日目に祖母は母の手から私を奪いとった。しじゅう閉て切った・病氣と老いの匂いにむせかえる祖母の病室で、その病床に床を並べて私は育てられた。

生れて一年たつたために、私は階段の三段目から落ちて額に傷を負った。祖母は芝居へ行っており、父の従兄妹たちが母もともどもに息抜きにさわいでいた。母がふと二階へ物をとりに行った。その母を追って行って、おひきずりの着物の裾がひっかかって、落ちたのである。

歌舞伎座へ呼出しがかけられた。祖母はかえって来て玄関に立ったまま、右手の杖に体を支えて、出迎えた父をじっと見つめたまま妙に落着いた一字一字を彫りつけるような口調で言った。

「もう死んだのかっ？」

祖母は巫子みこのような確信のある足取りで家へ上って来た。……

——五歳の元日の朝、赤いコーヒー様のものを私は吐いた。主治医が来て「受けあえぬ」と言った。カンフルや葡萄糖が針差のように打たれた。手首も上膊も脈が触れなくなつて二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。

経帷子きんずきや遺愛の玩具がそろえられ一族が集まった。それから一時間ほどして小水が出た。母の兄の博士が、「助かるぞ」と言った。心臓の働らきかけた証拠だといふのであ

る。ややあつて又小水が出た。徐々に、おぼろげな生命の明るみが私の頬によみがえった。

その病氣——自家中毒——は私の痼疾になった。月に一回、あるいは軽いあるいは重いそれが私を訪れた。何度となく危機が見舞った。私に向つて近づいてくる病氣の聲で、それが死と近しい病氣であるか、それとも死と疎遠な病氣であるかを、私の意識は聴きわけるようになった。

最初の記憶、ふしぎな確たる影像で私を思い悩ます記憶が、そのあたりではじまった。

手をひいてくれていたのは、母か看護婦か女中かそれとも叔母か、それはわからない。季節も分明でない。午後の日ざしがどんよりとその坂をめぐる家々に射していた。私はそのだれか知らぬ女の人に手を引かれ、坂を家の方へへぼつて来た。むこうから下りて来る者があるので、女は私の手を強く引いて道をよけ、立止った。

この影像は何度となく復習され強められ集中され、そのたびごとに新たな意味を附されたものであることはまちがいが無い。何故なら、漠とした周囲の情景のなかで、その「坂を下りて来るもの」の姿だけが不当な精密さを帯びているからだ。それもその筈、これこそ私の半生を悩まし脅かしつづけたものの、最初の記念の影像であつたからだ。坂を下りて来たのは一人の若者だつた。肥桶を前後に荷

い、汚れた手拭で鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目をもち、足で重みを踏みわけながら坂を下りて来た。それは汚穢屋——糞尿汲取人——であつた。彼は地下足袋を穿き、紺の股引を穿いていた。五歳の私は異常な注視でこの姿を見た。まだその意味とは定かではないが、或る力の最初の啓示、或る暗いふしぎな呼び声が私に呼びかけたのであつた。それが汚穢屋の姿に最初に顕現したことは寓^{うた}的である。何故なら糞尿は大地の象徴であるから。私に呼びかけたものは根の母の悪意ある愛であつたに相違ないから。

私はこの世にひりつくような或る種の欲望があるのを予感した。汚れた若者の姿を見上げながら、『私が彼になりたい』という欲求、『私が彼でありたい』という欲求が私をしめつけた。その欲求には二つの重点があつたことが、あきらかに思い出される。一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であつた。紺の股引は彼の下半身を明瞭に輪郭づけていた。それはしなやかに動き、私に向つて歩いてくるように思われた。いわん方ない傾倒が、その股引に対して私に起つた。何故だか私にはわからなかつた。

彼の職業——。このとき、物心つくと同時に他の子供たちや陸軍大將になりたいと思うのと同じ機構で、「汚穢屋になりたい」という憧れが私に泛んだのであつた。憧れの原因は紺の股引にあつたとも謂われようが、そればかりで

は決してなかった。この主題は、それ自身私の中で強められ発展し特異な展開を見せた。

というのは、彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を燃ゆるような悲哀への憧れのようなものを感じたのである。きわめて感性的な意味での「悲劇的なもの」を、私は彼の職業から感じた。彼の職業から、或る「身を挺している」と謂った感じ、或る投げやりな感じ、或る危険に對する親近の感じ、虚無と活力とのめざましい混合と謂った感じ、そういうものが溢れ出て五歳の私に迫り私をとりこにした。汚穢屋という職業を私は誤解していたのかもしれない。何か別の職業を人から聞いていて、彼の服装でそれと誤認し、彼の職業にむりやりにはめ込んでいたのかもしれない。そうでなければ説明がつかない。

なぜならこの情緒と同じ主題が、やがて、花電車の運転手や地下鉄の切符切りの上へ移され、私の知らない、又そこから私が永遠に排除されているように思える「悲劇的な生活」を彼らから強烈に感受させられたからだった。とりわけ、地下鉄の切符切りの場合は、当時地下鉄駅構内に漂っていたゴムのような薄荷のような匂いが、彼の青い制服の胸に並んだ金釦と相俟って、「悲劇的なもの」の聯想を容易に促した。そういう匂いの中で生活している人のことを、何故かしら私の心に「悲劇的」に思わせた。私の官能がそれを求めしかも私に拒まれている、或る場所、私に關係なしに行われる生活や事件、その人々、これらが私の

「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれていくという悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与ろうとしていくものらしかった。

とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれているということの逸早い予感もたらした悲哀の、投影にすぎなかったのかもしれない。

もう一つの最初の記憶がある。

六つときには読み書きができた。その絵本がよめなかつたとき、やはり五つの年の記憶に相違ない。

そのころ数ある絵本のなかのただ一冊、しかも見ひらきになっているただ一枚の絵が、しつこく私の偏愛に翹えていた。私はそれを見つめていると永い退屈な午後を忘れていることができ、しかも人がやって来ると何かなしにうしろめたくてあわてて別のページをあけた。看護婦や女中のお守りが私には煩わしくてならなくなった。一日その絵に見入っていられる生活がしたいと思った。その頁をあけるときは胸がときめき、他の頁を見ても心はそらだつた。

その絵というのは白馬にまたがって剣をかざしているジャンヌ・ダルクであった。馬は鼻孔を怒らし、逞ましい前肢で砂塵を蹴立てていた。ジャンヌ・ダルクが身に着けた白銀の鎧には、何か美しい紋章があった。彼は美しい顔

を顔当から覗かせ、凜々しく拔身を青空にふりかざして、「死」へか、ともかく何かしら不吉な力をもった翔びゆく対象へ立向っていた。私は彼が次の瞬間に殺されるだろうと信じた。いそいで頁をめくつたら、彼の殺されている絵が見られるかもしれぬ。絵本の絵は何かの加減でしらない間に「次の瞬間」へ移っていることがあるかもしれぬ。：

しかしあるとき看護婦が、何気なしにその絵の頁をひらきながら、横でちらちら盗み見ている私に言った。

「お坊ちゃま、この絵のお話御存知？」

「しらないの」

「この人男みたいでしょう。でも女なんですよ、本当は。女が男のなりをして戦争へ行ってお国のためにつくしたお話ですよ」

「女なの」

私は打ちひしがれた気持だった。彼だと信じていたものが彼女なのであった。この美しい騎士が男でなくて女だとして、何になろう。(現在も私には女の男装への根強い・説明しがたい嫌悪がある。)それはとりわけ彼の死に對して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢った最初の「現実からの復讐」に似ていた。美しい騎士の死の讚美を、後年、私はオスカア・ワイルドの次のような詩句に見出した。

葦と藪のなかに殺され横たわる、
騎士はうつくし。……

それ以来、私はその絵本を見捨てた。手にとることもしなかった。

ユイスマンは小説「彼方」のなかで、「やがて極めて巧緻な残虐さと微妙な罪惡に一転すべき性質のものなり」ジル・ド・レエの神秘主義的衝動は、シャルル七世の勅によつて彼がその護衛の任に當つたジャンヌ・ダルクのさまざまな信じ難い事蹟を目のあたり見るることによつて涵養された、と説いている。逆の機縁、(つまり嫌惡の機縁として)ではあるが、私の場合も、オルレアンの少女が一役買っているのだった。

——さらに一つの記憶。

汗の匂いである。汗の匂いが私を駆り立て、私の憧れをそそり、私を支配した。……

耳をすましてみると、ザックザックという混濁した・ごく微かな・おびやかすような響きがきこえてくる。時として喇叭がまじり・単純な・ふしぎに哀切な歌声が近づく。私は女中の手を引き、はやくはやくと急ぎ立て、女中の腕に抱かれて門のところ立つことへ心をいそがせた。

練兵からかえるさの軍隊が、私の門前をとおるのだった。私はいつも子供好きな兵士から、空になった藁莖をい

くつかもらうのをたのしみにしていた。祖母が危険だといつてそれを貰うことを禁じたので、このたのしみには秘密のよろこびが加わった。鈍重な軍靴のひびきや、汚れた軍服や、肩にかついだ銃器の林は、どの子供をも魅し去るに十分である。しかし私を魅し、かれらから葉莖をもらおうというたのしみのかくれた動機をなしていたのは、ただかれらの汗の匂いであつた。

兵士たちの汗の匂い、あの潮風のような・黄金きんに炒られた海岸の空気のような匂い、あの匂いが私の鼻孔を搏ち、私を酔わせた。私の最初の匂いの記憶はこれかもしれない。その匂いは、もちろん直ちに性的な快感に結びつくこととはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、そういうものへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根強く目ざめさせた。

……私が人生ではじめて出逢つたのは、これら異形の幻影だつた。それは実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立つたのだ。何一つ欠けているものもなしに。何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けているものもなしに。

私が幼時から人生に対して抱いていた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかつた。いくたびとなく無益な迷いが私を苦しめ、今もなお苦しめ

つづけているものの、この迷いをも一種の墮罪の誘惑と考へれば、私の決定論にゆるぎはなかつた。私の生涯の不安の総計のいわば献立表を、私はまだそれが読めないうちから与えられていた。私はただナブキンをかけて食卓に向つていればよかつた。今こうした奇矯な書物を書いていることすらが、献立表にはちゃんと載せられており、最初から私はそれを見ていた筈であつた。

幼年時代は時間と空間の紛糾した舞台である。たとへば火山の爆發とか叛乱軍の蜂起とか大人から告げられた諸国のニュースと、目前で起っている祖母の発作や家のなかのこまごました諍いざないごとと、今しがたそこへ没入していたお伽噺の世界の空想的な事件と、これら三つのものが、いつも私には等価値の、同系列のものに思われた。私にはこの世界が積木の構築以上に複雑なものとは思えず、やがて私がおそこへ行かねばならぬいわゆる「社会」が、お伽噺の「世間」以上に陸離たるものとは思えなかつた。一つの限定が無意識裡にはじまつていた。そしてあらゆる空想は、はじめから、この限定へ立向う抵抗の下に、ふしぎに完全な・それ自体一つの熱烈な願ひにも似た絶望を、滲ませていた。

夜、私は床の中で、私の床の周囲をとりまく闇の延長上に、燦然たる都会が泛ぶのを見た。それは奇妙にひっそりして、しかも光輝と秘密にみちあふれていた。そこを訪れ

た人の面には一つの秘密の刻印が捺されるに相違なかつた。深夜家へ帰ってくる大人たちは、かれらの言葉や举止のうちに、どこかしら合言葉めいたもの・フリーメイソンのじみたものをのこしていた。また彼等の顔には、何かきらきらした・直視することの憚られる疲労があつた。触れる指さきに銀粉をのこすあのクリスマスの仮面のように、かれらの顔に手を触れれば、夜の都会がかれらを彩る絵具の色がわかりそうに思われた。

やがて、私は「夜」が私のすぐ目近で帷かたびらをあげるのを見た。それは松旭斎天勝の舞台だつた。(彼女がめずらしく新宿の劇場に出た時だつたが、同じ劇場で何年かあとに見たダンテという奇術師の舞台は、天勝のそれよりも数層倍大がかりなものであつたのに、そのダンテも、また万国博覧会のハーゲンベック・サーカスも、最初の天勝ほどに私を愕かしはしなかつた。)

彼女は豊かな肢体を、黙示録の大淫婦めいた衣裳に包んで、舞台の上をのびやかに散歩した。手妻使い特有の亡命貴族のような勿体ぶつた鷹揚さと、あの一種沈鬱な愛嬌と、あの女丈夫らしい物腰とが、奇妙にも、安物のみが発する思い切つた光輝に身を委ねた贗造の衣裳や、女浪曲師のような濃厚な化粧や、足の爪先まで塗つた白粉や、人工宝石の堆たまりい瑰麗な腕環などと、或るメランコリックな調和を示していた。むしろ不調和が落す陰翳の肌理のこまかさ、独特の韻和感をみちびいて来ていたのだ。

「天勝になりたい」というねがい、
「花電車の運転手になりたい」というねがいと本質を異にするものであることが、おぼろげながら私にはわかつていた。そのもつとも顯著な相違は、前者には、あの「悲劇的なもの」への渴望が全くと云つてよいほど欠けていたことだ。天勝になりたいという希みに対しては、私はあの憧れと疾ましさと苛立たしい混淆を味わわずにすんだ。それでも動悸を押えるのに苦しみながら、私はある日母の部屋へ忍び込んで衣裳篋かばんをあけたのであつた。

母の着物のなかでいちばんごてごてした・きらびやかな着物が引摺り出された。帯は油絵具で緋の薔薇が描かれたものを、土耳其の大官のようにぐるぐる巻きにした。ちりめんの風呂敷で頭が包まれた。鏡の前に立つてみると、この即興の頭布の具合は、「宝島」に出てくる海賊の頭布に似ているように思われたので、私は狂おしい喜びで顔を隠てらせた。しかし私の仕事はまだまだ大変だつた。私の一挙一動、私の指先爪先までが、神秘を生むにふさわしいものでなければならなかつた。私は懐中鏡を帯のあいだにはさみ、顔にうすく白粉を塗つた。それから棒状をした銀いろの懐中電燈や、古風な彫金を施した万年筆や、何にまれまぶしく目を射るものをすべて携えた。

こうして私は、まじめくさつて祖母の居間へ押し出した。狂おしい可笑しさ・うれしさにこらえきれず、

「天勝よ。僕、天勝よ」

と云いながらそこら中を駆けまわった。

そこには病床の祖母と、母と、誰か来客と、病室つぎの女中とがいた。私の目には誰も見えなかった。私の熱狂は、自分が扮した天勝が多く目の目にさらされているという意識に集中され、いわばただ私自身をしか見ていなかった。しかしふとした加減で、私は母の顔を見た。母はこころもち青ざめて、放心したように坐っていた。そして私と目が合うと、その目がすっと伏せられた。

私は了解した。涙が滲んで来た。

何をこのとき私は理解し、あるいは理解を迫られたのか？「罪に先立つ悔恨」という後年の主題が、ここでその端緒を暗示してみせたのか？それとも愛の目のなかに置かれたときにいかほど孤独がぶざまに見えるかという教訓を、私はそこから受けとり、同時にまた、私自身の愛の拒み方を、その裏側から学びとったのか？

——女中が私を取押えた。私は別の部屋へつれて行かれ、羽毛をむしられる鶏のように、またたくまにこの不埒な仮装を剥がされた。

扮装慾は活動写真を見はじめることによって昂進した。それは十歳ごろまで顕著につづいた。

あるとき私は書生と「フラ・ディアポロ」という音楽映画をみに行った。ディアポロに扮した役者の、袖口に長いレエスをひるがえした宮廷服が忘れられなかった。僕あ

いあの着たいな、あんな髪かぶってみたいな、と私が言う
と、書生は軽蔑したような笑い方をした。そのくせ彼がよく女中部屋で八重垣姫の真似をしてみせて女中たちを笑わせていたことを私は知っていた。

しかし天勝につづいて私を魅したのはクレオパトラであった。ある年の暮ちかひ雪の日に、親しい医者が私にせがまれて、その活動写真へ私を連れて行つた。暮のことでお客は少なかつた。医者は手摺に足をのせて眠ってしまった。——ひとり私は耽奇の目で眺めていた。大ぜいの奴隷に担がれた古怪な輦台に乗って羅馬へ乗りこむ埃及の女王を。臉全体にアイ・シャドウを塗った沈鬱な目つきを。その着ていた超自然な衣裳を。それからまた、波斯絨毯のなかから現われたその琥珀いろの半裸の姿を。

私は、今度は祖母や父母の目をぬすんで、(すでに十分な罪の歎びを以て)妹や弟を相手に、クレオパトラの扮装に憂身をやつした。何を私はこの女装から期待したのか？後になって、私は私と同様の期待を、羅馬顔唐期の皇帝、あの羅馬古神の破壊者、あのデカダンの帝王獣、ヘーリオガバルスに見出だした。

こうして私は二種類の前提を語り終えた。それは復讐を要する。第一の前提は、糞尿汲取人とオルレ안의少女と兵士の汗の匂いとである。第二の前提は、松旭齋天勝とクレオパトラだ。

なお語られねばならない前提が一つある。

子供に手のとどくかぎりのお伽噺を渉猟しながら、私は王女たちを愛さなかつた。王子だけを愛した。殺される王子たち、死の運命にある王子たちは一層愛した。殺される若者たちを凡て愛した。

しかし私にはまだわからなかつた。何だつて数あるアンデルセン童話のなかから、あの「薔薇の妖精」の、恋人が記念にくれた薔薇に接吻しているところを大きなナイフで悪党に刺し殺され、首を斬られる美しい若者だけが、心に深く影を落すのかを。なぜ多くのワイルドの童話のなかで、「漁夫と人魚」の、人魚を抱き緊めたまま浜辺に打ち上げられる若い漁夫の亡骸だけが私を魅するのかを。

勿論、私は他の子供らしいものをも十分に愛した。アンデルセンで好きなのは「夜鷲」であり、また、子供らしい多くの漫画の本を喜んだ。しかしともすると私の心が、死と夜と血潮へむかつてゆくのを、避けることはできなかつた。

執拗に、「殺される王子」の幻影は私を追つた。王子たちのあのタイツを穿いた露わな身装と、彼らの残酷な死とを、結びつけて空想することが、どうしてそのように快いのか、誰が私に説き明してくれることができよう。ここに一つのハンガリーの童話がある。原色刷の、きわめて写実的なその挿絵は、永いあいだ私の心を虜にした。

挿絵の王子は、黒のタイツに、その胸には金糸の刺繍を施した薔薇色の上着を着け、紅いの墓地をひるがえした紺紺のマントを羽織り、緑と黄金のベルトを腰に巻いていた。緑金の兜、真紅の太刀、緑革の矢筒が彼の武装であつた。その白革の手袋の左手には弓をもち、右手は森の老樹の梢にかけ、凜々しい沈痛な面持で、今しも彼に襲いかかろうと狙っている竜の怖ろしい口を見下ろしていた。その面持には、死の決心があつた。もしこの王子が竜退治の勝利者としての運命を荷っているのだとしたら、いかほど私に及ぼす蠱惑は薄らいだことであらう。しかし、幸いなことに、王子は死の運命を荷っているのだつた。

遺憾ながらこの死の運命は十全のものではなかつた。王子は妹を救いまた美しい妖精の女王と結婚するために、七度の死の試煉に耐えるのだったが、口に含んだダイヤモンドの魔力のおかげで、七度が七度ともよみがえり、成功の幸福をたのしむに至るのである。右の絵は第一の死——竜に噛み殺される死——の直前の光景だつた。そののち彼は、「大きな蜘蛛につかまれて、毒の汁を体中に刺し込まれて、ががつ喰われ」たり、水に溺れて死んだり、火で焼かれたり、蜂や蛇に刺されたりかまれたり、大きな尖つた刀が数しれぬほど一面の切尖を並べてぎっしり植っている穴に身を投じたり、「大雨のように」無数に降りかかる大石に打たれて死んだりした。

「竜に噛まれる死」の件りはわけても巨細に、こんな風に

書かれていた。

「竜はすぐに、がりがりとして王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。したが、それをじっとこらえて、すっかりきれぎれにされてしまいますと、またふいに、もとの体になって、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついておりません。竜は、その場へ倒れて死んでしまいました」

私はこの箇所を百遍も読んだ。しかし看過してはならない欠陥だと思われたのが、「体にはかすれ傷一つついておりません」という一行であった。この一行を読むと私は作者に裏切られたと感じ、作者は重大な過失を犯していると考えた。

やがて何かの加減で、私は一つの発明をした。それはここを読むときに、「またふいに」から、「竜は」までを手で隠して読むことだった。するとこの書物は理想の書物の姿を具現した。それはこう読まれた。……

「竜はすぐに、がりがりとして王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。したが、それをじっとこらえて、すっかりきれぎれにされてしまいますと、その場へ倒れて死んでしまいました」

——こうしたカットの仕方から、大人たちは背理を読むであろうか？ しかしこの幼ない・傲慢な・おのれの好みに感溺しやすい検閲官は、「すっかりきれぎれにされて」という文句と、「その場へ倒れて」という文句との、明らか

かな矛盾はわきまえながら、なお、そのどちらをも捨てかねたのであった。

一方また、私は自分が斃死したり殺されたりしている状態を空想することに喜びを持った。そのくせ、死の恐怖は人一倍つよかった。女中をいじめて泣かせたりした明る朝、同じ女中が何事もなかったような明るい笑顔で、朝食の給仕に現われるのを見ると、その笑顔から私はさまざまの意味を読みとった。それは十分な勝算から来る悪魔的な微笑としか思われなかった。彼女は私への復讐に、おそらく毒殺の企らみをしたのであろう。私の胸は恐怖に波立った。きつと毒は、おみおつけに入れられたに相違なかった。そう思われる朝には、決しておみおつけに手をつけなかった。そして食事をすませて座を立ちざま、「それみれことか」と謂わんばかりに、女中の顔を見つめてやることで幾度かあった。女は食卓のむこうで、毒殺の企図が破れた落胆に立ちもやらず、冷めはて・いくつかの埃さえ浮いている味噌汁を、残り多げに見つめているように思われた。

祖母が私の病弱をいたわるために、また、私が変わるい事をおぼえないようにとの顧慮から、近所の男の子たちと遊ぶことを禁じたので、私の遊び相手は女中や看護婦を除けば、祖母が近所の女の子のうちから私のために選んでくれた三人の女の子だけだった。ちょっとした騒音、口のはげ